

荻原廣

- | | | | |
|------------------------|---|---|---|
| はじめに | 2 | 2 | 1 |
| 使用語彙、理解語彙とは | 3 | 2 | 1 |
| 先行研究 | 3 | 1 | |
| 阪本の理解語彙の調査 | 3 | 1 | |
| 森岡の理解語彙の調査 | 3 | 2 | |
| 語彙数推定テストを利用した理解語彙の調査 | 3 | 3 | |
| 柴田の調査 | 3 | 3 | |
| 松浦の調査 | 3 | 3 | |
| 萩原の調査 | 3 | 3 | |
| 3つの調査のまとめ | 3 | 3 | |
| 荒牧・増川・森田・保田の使用語彙の調査 | 3 | 4 | |
| 大学4年生の日本語の使用語彙、理解語彙の調査 | 4 | 1 | |
| 使用語彙の調査方法とは | 4 | 1 | |
| 内省法を使った語の使用率の調査 | 4 | 2 | |
| 今回の調査を行うにあたって | 4 | 3 | |
| 今回の使用語彙、理解語彙の調査 | 4 | 4 | |
| 被調査者 | 4 | 4 | |
| 調査時期 | 4 | 4 | |
| 調査方法 | 4 | 4 | |
| 調査結果 | 4 | 4 | |
| 考察 | 4 | 4 | |
| 今回の調査の問題点 | 4 | 5 | |
| おわりに | 5 | | |

個人の語彙量（使用語彙、理解語彙）についての調査は、現在に至るまで決して多く行われてきたとは言えず、中でも使用語彙についての調査は、調査方法が確立しておらず、ほとんど行われていない。

そこで本稿では、まず先行研究について述べた後、今回、大学4年生を対象に行った日本語の語彙量調査にて試みた内省法を使った使用語彙の調査方法について解説し、その後、調査結果及び考察について述べる。

1 はじめに

荻原(2014)で、過去に行われた個人の語彙量(使用語彙、理解語彙)に関する調査について、それがどのように行われ、そこにどういった問題点があるのかが明らかになった。そこで、本稿では、新たに考案した使用語彙の調査方法を用い、大学4年生の使用語彙、及び理解語彙を明らかにしようと試みるものである。

2 使用語彙、理解語彙とは

使用語彙、理解語彙とは何であろうか。まずは、過去にどのように定義されてきたかを見てみる。

玉村(1984)は、「理解語彙」というのは、ある個人(またはある学年の児童など)が聞いたり読んだりするときに理解することができる見出し語の集合であり、使用語彙(表現語彙)というのは、ある個人(ある学年の児童など)が話したり書いたりするときに用いることができる語の集合である。^①と述べている。しかし、その一方で「理解語彙」と言い、使用語彙と言っても、実際にはどうしてこれらの量を測定するのか。へ理解することができるかどうかをどういう方法で検査するのか、またへ使うことができるかどうかをどうして調べるのか、実は大きな問題な

のである。ただ、へ使った語を調べるというなら、確実に測定する方法はある。^②と、使用語彙については、使った語を調べる方法ならあるが、使うことができるかどうかの調査は難しいと述べている。

一方、真田(1977)は、「われわれが、確実に捕捉できるのは、使用し、る語ではなく、使用された語である。先にみてきたごとく、いわゆる語彙調査において対象にされたものは、書きことばにしる、話しことばにしる、まさに実際に使用された語彙に関してであった。したがって、筆者は、ここでは、この『使用された』語の総体を使用語彙と呼び、必ずしも正しい意味において使えるかどうかは別として、ともかく、聞いたり読んだりして、その意味を『理解しうる』語の総体を理解語彙と呼ぶことにしたいと思う。」(傍点原著)^③と使用語彙を使用された語と定義している。

しかし、日本語教育辞典(執筆者・山崎誠)は「理解語彙は、個人が見たり読んだりする際に理解しうる語の総体のことをいう。使用語彙には①個人が話したり、書いたりするときに使うことのできる語彙、②個人が実際に使用した語彙(漱石の語彙」など)の2つの意味がある」としながら、ただし、②の意味での使用語彙は、文学作品の研究などに用いられるとしている。つまり、「使った」「使用

された」語を調査するのは、あくまで文学作品の研究であつて、一般の個人の語彙量を対象とするなら、使用語彙は①であるというのである。

以上のように、使用語彙、理解語彙の定義に関しては、研究者によつて違いがあるが、今回の使用語彙、理解語彙の調査は、日本語教育辞典の定義に近い荻原(2014)の「理解語彙というのは個人が聞いたり読んだりするときを理解できる語の集まり、使用語彙というのは個人が話したり書いたりするときに使うことのできる語の集まり」^⑤との定義で行う。

3 先行研究

荻原(2014)に、今までに行われた個人の使用語彙、理解語彙の調査のうち、幼児を対象とした調査を除いた主なものについて、その概要が書かれているが、それ以降に発表された論文もあるため、今回は、幼児や児童のみが対象の調査、及び本来は使用語彙の調査ではない国研の「24時間調査」を除いた調査に、荻原(2014)以降に書かれた論文の内容も加え概観する。

3-1 阪本の理解語彙の調査

阪本(1955)は、一九三七年、内省法を使い、6歳から

20歳までの3936名の理解語彙の調査を試みた。語彙量テストに盛るべき語彙の選出は広辞林を用いたが、原則として見出し語を全て使う全数調査ではなく、一部の語を抽出してそのサンプルから推計する標本調査であつた。調査方法は、被調査者自身が内省しながら自ら調査用紙に記入する内省法である。なお、阪本は、意味を知っている語に○をつけさせる附印法だけでは間違いが生じるからと、その語の意味を書かせる定義法を併用した。

調査結果は、6歳から20歳までを更に前半と後半に分け(20歳のみ0か月から5か月のみ)公開した。^⑥ただ、全数調査ではなく標本調査のため、当然、誤差が生じる。しかし、阪本は、この調査の信頼度を成城小学校、鳴浜小学校、師範附属小学校の調査を引き合いに出し、これらの調査は「いずれもきわめて周到な用意をもつて調査せられたものであるから、これらの数字は信頼するに足るものである。」^⑦とし、よつて自身の調査について「大体においてその数が近似していることは、わたくしの概算的方法の信頼性を多少なりとも裏書するものである。」^⑧と述べている。

ただ、「これと比較するとわたくしの調査では満六歳六ヶ月の男子が六一四二、女子が五七三九であつて、やや多くなっている。」^⑨と成城小学校の4089語、鳴浜小学校の5019語、師範附属小学校の5230語よりも語彙量

の平均が多いことは認めている。

なお、林 (1971) は、1 年ごとに男女を合算した阪本の別の表を元に、林が推計した当時の教育段階に当てて、以下のように大まかにまとめた。¹⁰⁾

小学校入学時	6 歳	6 0 0 0 語
小学校卒業時	11 歳	2 0 0 0 0 語
中学校卒業時	14 歳	3 6 0 0 0 語
高等学校卒業時	17 歳	4 6 0 0 0 語
成人期	20 歳	4 8 0 0 0 語

3-2 森岡の理解語彙の調査

森岡 (1951) は、一九五〇年、内省法を使い、15 名の高校 1 年生の理解語彙の調査を試みた。竹原スタンダード和英辞典所載の見出し語を使った全数調査 (検査語彙は 37970 語) で、調査方法は、内省法である。なお、森岡は 4 つの理由 (①理解が正しいか否かを検するため②誤って印をつけることを防ぐため③検査の単調を破り興味をつなぐため④竹原の辞書にのっていない語を導く手掛りを得るため) で、附印法以外に関連語の記入を併用する形で調査した。

調査結果は、理解語彙の最高が 36330 語、最低が 2

3381 語、平均で 30664 語であった。ただ、この調査は、検査語彙が少ないのではないかとと思われる。なぜなら、理解度が最高 (36330 語) であった被調査者は、検査語彙の 95.7% も理解していたこととなり、仮に検査語彙がより多ければ、更に理解語彙が増えていた可能性も否定できないためである。なお、先に述べた阪本の結果と比較すると、阪本の調査では、男子が 16 歳前半で 43886 語、後半で 45962 語、女子が 16 歳前半で 42447 語、後半で 43382 語と、森岡の調査より多く、両者の調査結果には開きがある。これは、阪本の調査では、理解語彙の語彙量の実態より多い可能性があるからだけではなく、一方で森岡の調査では、理解語彙の語彙量の実態より少ない可能性があるからではないかと考えられる。

3-3 語彙数推定テストを利用した理解語彙の調査

語彙数推定テスト¹¹⁾は、NTT データベースシリーズ「日本語の語彙特性」第 1 巻の単語親密度データベースを用いた簡単に行うことのできる語彙量の推定テストである。

このテストで使用されている単語は、単語親密度データベースから、単語親密度を基準に選択されたものである。そして、その選ばれた単語を親密度順にならべ、目標とするテスト項目数になるように、ある一定間隔で単語を取り

出し作成されている。なお、テストは1〜3の3種類ある。そして、このテストを使って、大妻女子大学、北星学園大学、佛教大学で、大学生の理解語彙の調査が行われている。

3-3-1 柴田の調査

柴田 (2012) は、二〇一〇年と二〇一一年、大妻女子大学で語彙数推定テストを使った調査を実施した。被調査者は、全学部共通科目の「日本語（口頭表現）」の受講生（短大、4年制文系、家政系の一部の1、2年生の学生で、人数は不明）である。調査は、無記名でプリントアウトした3種類のテストを配布し、附印法（知っている単語にチェックを点けて提出してもらうという方式）により行われた。調査の結果、3つのテスト、それぞれの推定結果の平均を各学生の語彙量としているのだが、推定語彙量は、4年制学部生の平均が3万6千余語、短大国文の学生の平均が3万3千余語、短大他専攻生の平均が2万7千余語であり、全学生の平均語彙量はおよそ34900語であった。

3-3-2 松浦の調査

松浦 (2015) は、二〇一三年、北星学園大学で語彙数推定テストを使った調査を実施した。被調査者は、共通科目「日本語表現Ⅰ」の受講生（二〇一三年度入学の1年生、

575名）である。調査は、プリントアウトしたテスト1を配布し、附印法（知っている単語の番号を○で囲んで提出してもらうという方式）により行われた。調査結果は、最大値64600語、中央値33400語、最小値2560語、平均値33611語であった。なお、松浦は、同時に対義語の運用に関する調査も行い、分析している。

3-3-3 荻原の調査

荻原 (2014) は、二〇一三年、佛教大学で語彙数推定テストを使った調査を実施した。被調査者は、「日本語学概論2」の受講生（日本文学科、中国学科、仏教学科、人文学科の2年生から4年生までの96名）である。調査は、プリントアウトした6種類のテストを配布し、附印法（知っている単語の番号を○で囲んで提出してもらうという方式）で行うことにした。しかし、ただ、知っている単語を選んで提出してもらうという方式だけなら阪本や森岡が言うように間違いが生じる可能性がある。だからといって、阪本や森岡のような定義法や関連語を書かせるといった方法を併用すると、調査者にも被調査者にも負担がかかる。ということから、より負担の少ない方法として、各語の横に、辞書に載っている意味をつけたものを用意し、それを見て自分で知っているかどうかの確認をさせると言う方法

を考案、それを併用し、間違いが生じるのを防ぐこととした。

やり方は、まず単語だけを書いたテストをさせ、その後もう一度、今度は各語の横に辞書に載っている意味をつけたテストをさせた。なお、多義語の場合は、一つでも知っていれば、知っているのとみなした。調査結果は、単語のみのテストだと、テスト1は43283語、テスト2は37982語、テスト3は35244語、3つのテストの平均は38821語であったが、一方、各語の横に意味をつけたほうのテストは、テスト1は40119語、テスト2は36504語、テスト3は33035語、3つのテストの平均は36588語であった。

このように、単語のみを書いたテストと、各語の横に意味をつけたテストの結果を比べると、やはり差が生じる結果となった。なお、1―3のテストの全てにおいて、単語のみを書いたテストと各語の横に意味をつけたテストの結果が全く同じだった者は、96名中、わずかに3名しかいなかった。やはり、調査用紙に単語のみを書き○をつけさせる附印法だけだと、間違つて印をつけてしまう可能性が高いのである。しかも、各語の横に意味をつけたテストの結果のほうが、総じて語彙量が少なくなっており、つまりは、調査用紙に単語のみを書き○をつけさせる附印法だけだと、

知っているつもりが実は知らない語にまで印をつけてしまい、語彙量が実力以上に多くなってしまうことが明らかになった。一方、このことは、定義法や関連語を書かせることにより調査者が判断するといった方法ではなく、被調査者が自分自身で知っているかどうかを判断するという方法でも、正確に個人の語彙量が測れるということに他ならないだろう。

また、3種類のテストには、難易度に差があることがわかった。テスト1と3は平均で7000語以上も差がある。つまり、難易度の低いテストを受けると語彙量は多く、難易度の高いテストを受けると語彙量は少なくなるのである。このことから、単語親密度を用いたこの語彙数推定テストの推定の精度は、現時点では信頼性に欠けるところがあると言えるであろう。

3―3―4 3校の調査のまとめ

以上の3校の調査を概観したところで、最後に比較してみたい。

同じ条件のところ（調査方法と使用したテストが同じところ）を比較してみると、松浦（2015）のテスト1と荻原（2014）のテスト1は、それぞれ平均33611語、43283語と1万語近い差がある。ただ、これは、対象とし

調査論文	学 年	人数	調査方法	テスト 1	テスト 2	テスト 3	全テスト の平均
柴田 (2012)	1、2年生	不明	単語のみの附印法				3万6千 余語
松浦 (2015)	1年生	575名	単語のみの附印法	33611 語			
荻原 (2014)	2年生～ 4年生	96名	単語のみの附印法	43283 語	37982 語	35244 語	38821 語
荻原 (2014)	2年生～ 4年生	96名	単語に意味をつけた テストへの附印法	40119 語	36504 語	33035 語	36588 語

た学年が、それぞれ入学初年度、2～4年生と違うため、このような結果になったということが可能性としてあるだろう。一方、柴田(2012)のテスト1～3までの平均と荻原(2014)のテスト1～3までの平均は、それぞれ3万6千余語、38821語とそれほど差がなかった。

なお、先に述べたように荻原(2014)の2つの調査方法を比べると、単語だけを書いたテストと単語の横に意味をつけたテストの結果に差が生じて(単語だけを書いたテストだと語彙量の実力以上に多くなってしまう結果となっている)。そこから考えると、柴田(2012)、松浦(2015)の結果は、若干割り引いて考える必要がある。

ただ、3つの調査のどれをみても、大学生の語彙量としては少ないように思われる。それは、多めに出血していると思われる阪本(1995)の調査では中学校卒業時で平均3600語、また少なめの可能性がある森岡(1991)の調査でも、高校1年生で平均30664語といった結果となっており、そこから推察できるだろう。つまり、先に語彙数推定テストの推定の精度は、現時点では信頼性に欠けるところがあると述べたが、更に言えば、語彙数推定テストは、実際に個人が保有している語彙量より、低い結果となってしまうのではないかと思われる。

なお、大学生の語彙量に関しては、田島・佐藤・橋本・

松下・笹尾 (2016) が「語彙サイズテスト」を開発し、二〇一四年に実施しているが、最高でも30000語までしか推計できず、現時点では、大学生の語彙量を測定するには十分なテストとは言えないであろう。

3-4 荒牧・増川・森田・保田の使用語彙の調査

荒牧他 (2012) は、Twitter を使って二〇〇九年十一月三日から二〇一〇年三月二十五日の143日間、ユーザ数約10万人 (99964人)、全ツイート数約2.5億ツイート (253,423,781ツイート) の規模の使用語彙の調査をしている。調査方法は、一定期間にユーザが発言した語数から、潜在的な語彙数Nを推測するという方法であるが、その推測はユーザがジップ則にしたがって語を発生していると仮定することで可能としている。そして調査の結果、オンライン・コミュニケーション上での平均使用語彙数は8000語と推定した。

ただ、この調査の使用語彙の対象は「話し言葉」のみである。¹³⁾つまり、過去の発言のみが対象で、過去に書かれたものは調査対象とはなっていない。しかし、使用語彙が、個人が話したり、書いたりするときに使うことのできる語彙であるならば、この調査は、書く行為を調査対象としていないため、厳密に言えば、個人の使用語彙の全体像を明

らかにしようとした調査とはなっていない。正確に言うなら「話し言葉における使用語彙の調査」とせねばならないだろう。

しかし、それ以上に問題なのは、この調査では、どの年齢層の語彙量がどのくらいかといったことが全くわからないことである。タイトルに「日本人のオンライン・コミュニケーション上での平均使用語彙数は8000語」とあるが、この「日本人」とは、中学生から利用できるTwitterを使って調査しているため、中学生も高校生も大学生も社会人も含んだ「日本人」である。しかし、理解語彙の語彙量が中学生、高校生、大学生と年を経るにつれて上がっていくことから考えると、当然使用語彙の語彙量も、年とともに上がっていくものと推察されるが、それら異なる年代の語彙量を全て一緒にしてしまったため、使用語彙の実態が何ら明らかにされない調査となってしまった。

4 大学4年生の日本語の使用語彙、理解語彙の調査

4-1 使用語彙の調査方法とは

先に述べたように、玉村 (1984) が、「使用語彙 (表現語彙) というのは、ある個人 (ある学年の児童など) が話したり書いたりするときに用いることができる語の集合で

ある。」と述べているにもかかわらず、その一方で「へ使うことができるかどうか」をどうして調べるのか、実は大きな問題なのである。ただ、「使った」語を調べるというなら、確実に測定する方法はある。」と、定義では使用語彙を「話したり書いたりするときに用いることができる語の集合」としながらも、調査方法に「使った語を調べる」方法を挙げているのも、荒牧他(2012)がTwitterを使って使用された語彙の調査をしたのも、すべては、使用語彙は外から捕捉するしかないと考えたからであろう。しかし、本当にそうであろうか。

恐らく、今までの多くの研究者が抱いた個人の語彙量調査に対する認識は、理解語彙はインプット、すなわち読んだり聞いたりする際に理解できる語の集合なので、内側で測定する(内省法で測る)ものであるのに対し、使用語彙はアウトプット、すなわち書いたり話したりする際に使用できる語の集合なので、外側で測定する(使用されたもの、つまり書かれたり話されたりしたもので測る)ものであると考えられ、そこで外側で測定するにはどうしたらいいか、そのような方法をどう確立するかが問題になってきたのだろうと思われる。しかし、書いたり話したりする際に使用できる語というのは、自分以外の誰かの使用語彙を外側から調査するなら、確かに、「書かれたり話されたりしたも

の」以外に知る方法はないであろうが、被調査者自身が発分について調査するなら、当然、表出する前は、内側にあるのだから、内側で測定する(内省法で測る)ことは可能はずであり、その個々の結果を集計すれば、使用語彙の調査となるはずである。つまり、従来、理解語彙にのみ利用されていた調査法の内省法は、使用語彙についても利用できるというわけである。

実際、語学教育、たとえば日本語教育において、教師が学習者に日本語の新出語彙を導入する際は、教師自身が一つ一つの単語を「これは使用語彙、これは理解語彙」と判断し、授業に臨んでいる。つまり、語学教育を行っている教師にとって、使用語彙が内省法で判断できるというのは、以前から半ば公然の事実として存在していたのである。¹⁵⁾

4-2 内省法を使った語の使用率の調査

では、過去に一部でも使用語彙を内省法で調査した例はないのだろうか。調べてみると、使用語彙の調査ではないが、ある語を使用するかどうかを内省法で調査した例がある。

一つは、国立国語研究所が行った『外来語定着度調査』(平成14年11月～平成16年8月随時実施)である。¹⁶⁾

この調査は、単語を書いたカードを提示して以下の質問

をするという形で行われた。

a あなたは、ここにあげた(1)から(30)の言葉を、聞いたこと、また見たことがありますか。↓(ア)ある／(イ)ない

b (聞いたこと、見たことが「ある」と答えた人に)それでは、その言葉の意味は分かりますか。↓(ア)分かる／(イ)何となく分かる／(ウ)分からない

c (言葉の意味が「分かる」「何となく分かる」と答えた人に)自分でその言葉を使ったことがありますか。

↓(ア)ある／(イ)ない

そして、aの質問に「ある」と回答した人の比率を認知率、bの質問に「分かる」と回答した人の比率を理解率、cの質問に「ある」と回答した人の比率を使用率とした。つまり、この調査は、その語を知っているか、意味が分かるか、使ったことがあるかを全て内省法で調査しているのである。ただしこれは、ある個人がこれらの語を知っているか、これらの語の意味が分かるか、これらの語を使ったことがあるかをそれぞれ集計する調査ではなく、それぞれの語が、どの程度認知されているか、理解されているか、使用されているかの調査である。つまり、個人の使用語彙、

理解語彙を測る語彙量調査ではなく、ある語の認知率、理解率、使用率を明らかにする調査なのである。しかし、個人の使用語彙、理解語彙を測る語彙量調査も、ある語の認知率、理解率、使用率を測る調査も、人ごとに見るか、単語ごとに見るかの違いだけで、調査対象となる語について内省法で調べている点に変わりはない。

更に一つは、文化庁文化部国語課が行っている国語に関する世論調査である。¹⁶⁾一例をあげると、『平成13年度国語に関する世論調査』(平成14年1月調査)のQ4は「あなたは、ここに挙げた(1)から(10)の言葉を使うことがありますか。また、意味が分かりますか。」との問で、「使う」「使わないが、意味は分かる」「使わないし、意味も分からない」「分からない」から選択するようになっていて、これは「使う」「使用率」「使わないが、意味は分かる」「理解率」を調べる調査と言える。つまり、調査対象となる語を使用するかどうかについて内省法で答えてもらっている点は、国立国語研究所が行った『外来語定着度調査』と変わりはない。

なお、この二つの調査を比較すると、『平成13年度国語に関する世論調査』は使用率を「使う」で調査し、一方、『外来語定着度調査』は使用率を「使ったことがある」で調査しているところが違うのだが、「使ったことがある」

かどうかを聞いた場合、使ったことがあるかどうかが曖昧で判断に迷い、使えるけれど使ったことがあるとは自信を持って言えないので使用語彙には入れないなどとするケースも考えられ、正確な調査結果が出ない可能性が否定できないため、「使う」あるいは「使うことがある」で調査したほうがよいであろうと思われる。

4-3 今回の調査を行うにあたって

今回の調査は、辞書からランダムに選んだ少数の単語から全体を推し量る「標本調査」ではなく、辞書の見出し語を原則として全て使う「全数調査」のため、同じく全数調査を行った森岡（1951）の「義務教育終了者に対する語彙調査の試み」を参考にした。

森岡の調査方法は、竹原スタンダード和英辞典所載の見出し語をすべて印刷（384頁）して検査語彙としたのだが、検査語彙が37970語と少ない。そこで、収録項目数が約82000と多い『三省堂国語辞典第七版』を使用することにした。これは、今回の被調査者が高校生よりも語彙量が多いであろう大学生であることが大きな理由であるが、更に、新語を中心とした新規項目が約4000もあるため、若者向きだと言えるのもこの辞書にした理由である。

なお、三省堂国語辞典は、前見返しに略語表があり、そこを見ると、品詞をどう扱っているかがわかるのだが、品詞については、以下のように挙げられている。

名詞、代名詞、自動詞、他動詞、自動詞・他動詞、補助動詞、形容詞、補助形容詞、形容動詞、連体詞、副詞、接統詞、感動詞、助動詞、格助詞、副助詞、接統助詞、終助詞

つまり、いわゆる学校文法の10品詞を品詞として扱っているのである。一方、接頭語、接尾語、造語成分、連語、慣用句（イデオム）などは品詞以外に挙げられている。そこで、今回は、助詞や助動詞も含めた10品詞についてのみ扱い、それ以外は、採用しないこととした。よって、調査対象となる語の数は約82000語ではなく、それより少ない。

また、森岡（1951）では、附印法と関連語の記入を併用している。まず、附印法だが、知っているかどうかについて次の符号をつけるようになってい⁽¹⁵⁾る。

○ よく知っていていつも使っていると思う語

▽ 聞け・読めば意味がわかると思う語

△ 聞いた・読んだことはあるが意味のはつきりしない語

× ぜんぜん分らない語

そして、森岡は、この符号のうち、○と ν を理解語とし、△と×を理解されぬ語として取り扱うこととしたとしている。しかし、捉えようによつては、△は認知語、 ν は理解語、○は使用語のようにも見えるであろう。ただ、正確にいえば、ここまで述べてきたように、使用語は「いつも使っている」語でなくても、「使うことができる」語なら使用語であるので、○の説明の部分を少し変える必要がある。

ということ、今回は、符号を○と ν だけにして、○を理解語の、 ν を使用語の符号として使用することとした。

なお、森岡は、附印法と併用する形で、検査語彙の語と関係のある語を書き入れる方法も取り入れている。これは、すなわち意味、言いかえ、反対語、同類語、その他連想などによって思いついた語を書き入れるという方法である。なお、以下のような例が挙げられている¹⁹⁾。

例1) ○カワ(川・河) 山水 小川
例2) ν ケンビ(兼備) 名 才色

例3) △カワウソ(川獺)
例4) ×ケンカ(鹵化)

確かに、附印法だけでは、間違いが生じることは、荻原(2014)でも確認されている²⁰⁾。しかし、定義法や関連語を書かせるといった方法は調査者にも被調査者にも多大な負担がかかる。よつて、より負担の少ない方法として、荻原(2014)が語彙数推定テストでの調査の際に用いた、各語の横に意味をつけたもので調査する方法を採用したほうがいいと判断し、また、今回は辞書に収録された語を使つた全数調査のため、語に意味の付いたリストを作るのではなく、辞書そのものを使用することとした。

4-4 今回の使用語彙、理解語彙の調査
4-4-1 被調査者

最初は、佛教大学(通学生)の4年生15名に協力を依頼した。(男女別の内訳は女性11名、男性4名)これは、森岡の調査が15名だったのを参考にしたからであったが、3名(女性1名、男性2名)は提出の締め切り日(卒業式)までに間に合わず、よつて最終的には12名(女性10名、男性2名)となった。この12名を学科別で見ると、日本文学科10名、中国学科1名、公共政策学科1名となっている。

4-4-2 調査時期

二〇一四年四月に開始し、二〇一五年三月（但し、卒業式まで）を提出期限とした。なお、開始前に、4回（四月七日、八日、十日、十四日）に分けて、語彙量調査の被調査者になるにあたっての説明会を行い、その後に、調査用の辞書を配布した。辞書を提出してくれた12名のうち、一番提出の早かった被調査者は二〇一四年七月十六日、一番提出の遅かった被調査者は二〇一五年三月十八日の提出であった。

4-4-3 調査方法

調査を行うにあたって、被調査者に、以下のような注意を行った。（文書で配布し、口頭でそれを元に説明した）これは、「使用語彙」「理解語彙」に対する認識を共通にしておくためである。

1 まず、語を見て、次に、語義のところを読むこと。

2 語義のところを読んで、知っている語（理解語）だと思えば、その語には赤いボールペンでマルをつける。

（語を囲む）一方、知っているだけではなく、使うこととある語（使用語）だと思えば、その語の上部に青いボールペンでチェックを入れる。

3

知っている語といっても、語義の全てを知っている必要はない。なお、知らない語とは、全く聞いたことのない語であったり、聞いたことはあるが意味は知らない語、また、語義を見ると自分の思っていた意味と全く違っていたという場合も知らない語となる。

4

使うこともある語とは、今までに使ったことがある語、または、使ったかどうかは覚えていないが、使う状況にあれば使うだろうと思われる語のことである。たとえば、「薄暗い」「ほの暗い」という2つの語の場合、それらを使ったことがあるかどうかは自信がなくても、夕暮れ時に、外を見た際に何となく考えた場合、「あ、もう薄暗くなってきた」とは言うけど、「あ、もうほの暗くなってきた」とは言わない（但し、意味はわかる）と思えば、「薄暗い」は使用語に入り、「ほの暗い」は理解語に入ることになる。一方、どちらの語も意味はわかるが、夕暮れ時に、外を見た際には、私は「少し暗くなってきた」と言い、どちらの語も使わないと思うなら、「薄暗い」も「ほの暗い」も、どちらも理解語に入る。つまり、使うこともある語とは、今まで使ったことがあるかどうかにかかわらず、自身が話したり書いたりする際に使用すると思われる語である。

表 1 使用語彙と理解語彙の語数、及びその割合
(使用語彙、理解語彙の単位は「語」)

被調査者	使用語彙	理解語彙	割合 (使用語彙／理解語彙)
G	16890	28142	60.0%
C	30616	34840	87.9%
K	4096	38785	10.6%
H	30814	41909	73.5%
L	33069	42244	78.3%
F	12408	42473	29.2%
J	34820	44473	78.3%
D	25446	47702	53.3%
I	40158	50243	79.9%
E	41192	54029	76.2%
B	46088	58362	79.0%
A	55187	61045	90.4%
平均	30899	45354	68.1%
中央値	31942	43473	77.3%

5 語によっては、多義語（複数の語義がある語）の場合もあるが、そのうち、一つでも知っている語義があれば理解語に入るとみなす。また、一つでも使うこともある語義があれば使用語に入るとみなす。

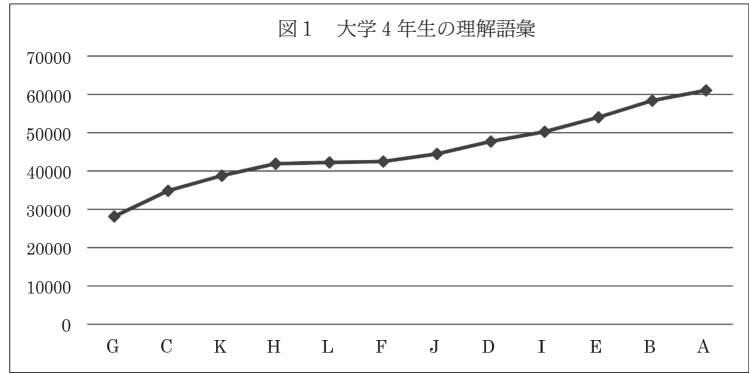
なお、全数調査であるため、約 8 2 0 0 0 項目のうち、

学校文法でいうところの 10 品詞全てを調査語彙とする非合理的且つ被調査者に多大な負担を強いる調査となった。

4-4-4 調査結果
被調査者 12 名が自身の使用語彙と理解語彙にチェックを入れ、マールをつけた辞書をデータとして整理し、まとめたものが、表 1 である。

では、この表をもとに、以下に図なども用いて考察する。

4-4-5 考察
理解語彙の量が少ないほうから並べたのが図 1 である。縦軸は語彙量（単位は「語」）、横軸は、被調査者名の



代わりとなる記号である。右へ行くにしたがって緩やかに上昇しているが、個人差があることが、はっきりと読み取れる。最小値、最大値、平均値、中央値、標準偏差は次の通りである。

最小値	2	8	1	4	2	語
最大値	6	1	0	4	5	語
平均値	4	5	3	5	4	語
中央値	4	3	4	7	3	語
標準偏差	9	1	3	1	語	

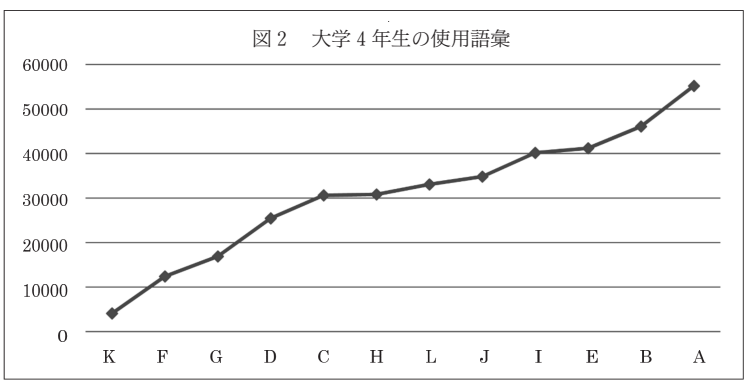
最小値と最大値の差は、約2.17倍であった。つまり、同じ大学の同じ学年でも、理解語彙が最も多い学生と最も少ない学生の間には、2倍以上の差があり、結果として、大学4年生の日本語の理解語彙というのは、個人差が大きいということがわかった。

一方、平均値は約45000語であった。これは、林(1971)が阪本や森岡の調査を参考にして「日本人の成人の理解語彙量は大体4万語程度であろう」と推察したのよりも多く、また、語彙数推定テストを利用した理解語彙調査のどの調査よりも多かった。最近の大学生は語彙量が昔に比べて減った、減らないとの議論があるが、大学生の理

解語彙の量を標本調査にせよ全数調査にせよ、測定した研究が全くなかったのにもかかわらず意見を述べることに、今まで疑問を抱いてきたが、今回の調査で今後、少なくとも現在の大学生の理解語彙の量については述べる事ができよう。そこで述べると、この結果を見る限り、先に述べた林の日本人の成人の理解語彙は4万語程度であるという推察よりも多く、決して現在の大学生は理解語彙の量が少ないとは言えないであろう。

なお、中央値は43473語で、中央値は平均値の約0.96倍と、ほとんど差がなかった。次に、使用語彙の量が少ないほうから並べたのが図2で

図2 大学4年生の使用語彙



ある。縦軸は語彙量(単位は「語」)、横軸は、被調査者名の代わりとなる記号である。理解語彙に比べると、右へ行くにしたがって、より大きく上昇していて、個人差の大きさがはつきりと窺える。最小値、最大値、平均値、中央値、標準偏差は次の通りである。

最小値	4096語
最大値	55187語
平均値	30899語
中央値	31942語
標準偏差	13900語

玉村(1984)は、「個々人の使用語彙の調査は、まだ極端に少ない。潜在的である理解語彙と比べると、使用語彙における個人差は、質的にも量的にもたいへん大きいことはたしかである。」²²⁾と述べているが、今回の調査では、最小値と最大値の差は、約13.47倍となっている。これは、理解語彙の最小値と最大値の差が約2.17倍だったのに比べると、個人差が更に大きいと言えるだろう。

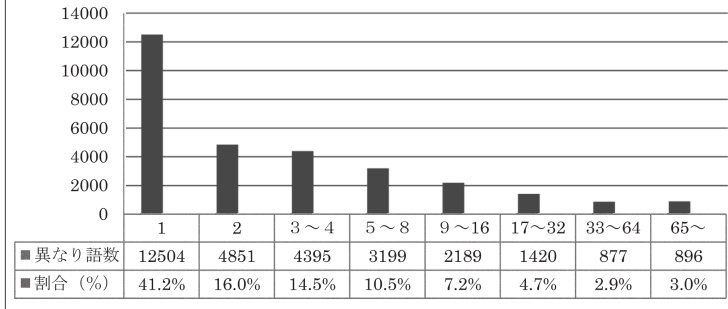
一方、使用語彙の平均値は約30000語で、中央値とそれほど変わらない。(中央値は平均値の約1.03倍)。これは、林(1971)が、「使用語彙は調査法がむずかしく、まだ調

査例に接していないので、日本人の平均使用語彙量がどのくらいのものか、いっこうにわからないが、理解語彙量よりずっと少ないことは確かだろう。」²³⁾と述べ、また、窪田(1990)が、「個人の語彙量はどのくらいあるのか。各個人が見たり聞いたりした場合に分かる単語の数と、実際に使う単語の数との間には、かなり大きな隔たりがあると考えられている。前者を一般に『理解語彙』(または獲得語彙)と呼び、後者を『使用語彙』(または発表語彙)と呼んでいる。」²⁴⁾と述べているような結果とは異なるのではないだろうか。林の「ずっと少ない」、窪田の「かなり大きな隔たりがある」というのが抽象的な表現のため、それがどの程度の「少なさ」、「隔たり」かは、はつきりとはわからないが、しかし、その表現からは、使用語彙が理解語彙の約2/3であるという事実とは異なるような印象を受ける。

ただ、今まで使用語彙は理解語彙よりかなり少ないのではないかということは、林や窪田以外にも、言われてきた。しかし、これは、「高使用頻度語彙≡使用語彙」ではないにもかかわらず、「よく使う語」が「使用語彙」であるというイメージが一般にあったからではないか。たとえば、国立国語研究所の「24時間調査」などを見ると、1日に使う語の数(異なり語数)は、最も多い被調査者でも二千数

百語程度しかないが、そういった日常会話でよく使われる語がイコール使用語彙と誤解して受け止められれば、使用語彙は少ないというイメージを持つであろう。

図3 現在雑誌九十種の用語用字のうち
人名・地名を除いた語の度数分布



しかし、使用語彙の中には、当然ながらめったに使われない語も含まれる。たとえば、今の大学生は、メールを書く機会は多くとも、手紙を書く機会はそれほど多くはないであろう。とすれば、「敬具」などは、年に数回、いや在学中に1、2回しか使わないなどということも考えられる。しかし、機会は少ないとはいえ使用することがあるのなら当然使用語彙に含まれる。つまり、このようにめったに使わない語が使用語彙の

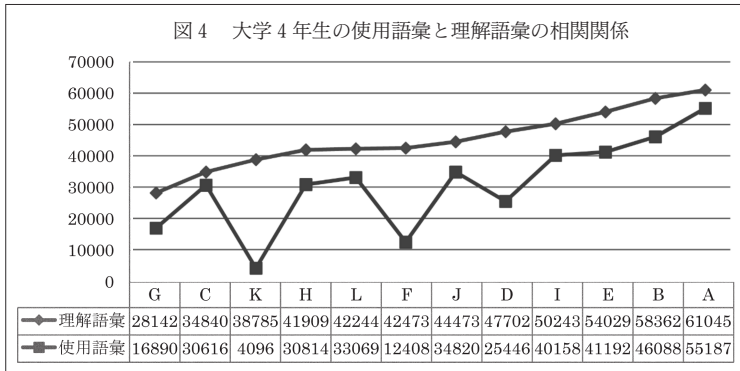
中に数多く存在しており、それが使用語彙の量を押し上げているのではないかと思われる。そして、このことは、過去の語彙調査（語彙量調査ではない）と関連しているのではないだろうか。

一例として、図3に現代雑誌九十種の用語用字の「人名・地名の度数分布」（総計39930語）のうち、人名・地名を除いた語（総計30331語）の度数分布を示す。

今回の調査で使用語彙の平均は約30000語だったが、図3の異なり語数の総計は、図らずも約30000語であったため、参考とするには、ちょうどよい資料であるのだが、²⁵⁾これを見ると、やはり使用度数の少ない語の数が圧倒的に多くを占めている。使用度数1で約4割、使用度数2で半数を超え、使用度数4までで約7割を占める。つまり、30331語のうち21750語が使用度数4以下の語なのである。このように語彙調査において、めったに使わない語が多くを占めるのは、個人の語彙量調査においても同じなのではないだろうか。

また、それが可能かどうかは別として、もし仮に、使用語彙を内からの調査ではなく、外からの調査で測定しようとした場合、たとえ測定期間が1年あったとしても、こういった、めったに使わない語が多くを占めているのなら、

それらを全て捕捉するのは不可能であろうと推察され、実際に正確な数値はわからないであろうと思われる。



最後に、最小値と最

大値の差だが、最小値の被調査者Kは、調査終了時、本人より、自分は無口なため、使用語彙は、他の人よりずっと少ないのではないかとこの発言があった。

使用語彙には話す際の語彙以外に書く際の語彙も含まれるが、無口なタイプは使用語彙が少ない可能性があるのではないだろうか。

一方、今回の被調査者は、日本文学科の学生が多いのだが、佛教大学の日本文学科は、小説家になった卒業生もあり、そういった小

説家を志すような学生の中には、使用語彙が他の学生より多い可能性があるのではないかと思われる。

そして図4は、使用語彙と理解語彙の相関関係を表したものである。縦軸は語彙量(単位は「語」)、横軸は被調査者名の代わりとなる記号である。下に、語彙量の表をつけてある。中原(2015)は、「理解語彙の増加によって、場面に応じて適切に用いることのできる使用語彙も増加する可能性がある。」²⁶⁾としているが、理解語彙の多い上位4名は、使用語彙も多く、ある程度の相関関係が見られるが、それより理解語彙の少ない被調査者は、必ずしも相関関係があるとはいえず、今回の調査では、理解語彙が多いからと言って、使用語彙も多いとは一概には言えないことがわかった。

4-5 今回の調査の問題点

今回、調査を行った際に、問題となった点がいくつかあったので、ここでその点について挙げておく。

まず、問題となったのは、調査の際に、漏れている箇所が数人に見つかったことである。そして、これは、調査方法により2つのパターンが見られた。その前に、調査方法(印をつけていく方法)について述べておくと、調査方法は、1語ごとに理解語か使用語かの印をつけていく方法、

ページごと（1ページから数ページ、あるいは数十ページ程度）にまず理解語だけ印をつけ、次に使用語に印をつけていく方法、更には、理解語だけ全て印をつけた後で、使用語に印をつける方法と、いくつか考えられる。そのやり方は、被調査者に委ねたが、やり方の違いで、2種類の記入漏れがあった。1つは、理解語彙の符号「○」がないのに、使用語彙の符号「v」がついている例。これは被調査者1名（被調査者C）にいくつか見られたが、1語ごとに、理解語彙の符号「○」、使用語彙の符号「v」をつけていくと、場合によっては、気がはやって、理解語彙の符号「○」をつけずに、使用語彙の符号「v」のチェックを入れてしまうことがあるのだろうと推察される。ただし、使用語彙は理解語彙に含まれるため、使用語彙の符号「v」のチェックだけがあつた語は、理解語彙としてもカウントした。

一方、被調査者B、D、E、Iは、それぞれ使用語彙の符号「v」のチェックが抜けていると窺えるページ（理解語彙の符号「○」のみつけてあり、使用語彙の符号「v」のチェックが全くない）があつた。これは、まず理解語だけ全てマルをつけた後で使用語をチェックする方法で生じるであろうミスで、使用語のチェックをしていく際に、そのページを飛ばしてしまったのであると推察される。そ

れぞれ、抜けたページ数を総ページ数で割ると、被調査者EとIは0.1%程度、被調査者Dは0.2%程度、被調査者Bは0.8%程度、使用語が抜けている可能性があり、それぞれ同程度、使用語彙が増える可能性がある。

次に、推定される語彙の最大数だが、これは辞書の語数以上にはならない。よって、今回、先行論文に書いた過去の理解語彙の調査が全てそうだったように、今回の調査においても、実際に知っている語の数よりも理解語彙が少ない可能性はある。またそれは、使用語彙においても同じである。

最後に、今回は、全数調査であつたため、被調査者が12名と、森岡の調査よりもさらに少なかった。ただ、表や図を見ると、同じ大学で同じ学年、しかも同じ学科の学生が多いにもかかわらず、使用語彙においても理解語彙においても、個人差があることが読み取れた。

5 おわりに

先に、被調査者は12名と書いた。ただし、それは、今回の条件（被調査者が大学4年生であること）に限って言えばのことである。というのも、今回は、大学4年生に対する調査について書いたが、実は、これは2年にわたって行った調査の半分である。この調査は、二〇一四年度から二

〇一五年度にかけて、2年にわたり行っており、今回のデータは、このうち二〇一四年度に大学4年生に対して行った調査結果のみである。つまり、正確に言えば、今回の報告は、途中経過なのである。このほかに、二〇一五年度に行った大学2年生に対する調査（20名に依頼し、13名からデータ提供を受けた）があり、これを含めた25名の調査がこの調査の全容である。今回、まずは、先に行った大学4年生に対する調査結果を報告したが、今後、データの整理が終わり次第、大学2年生に対する調査結果も報告する予定である。

なお、どうして二〇一五年度の調査が大学1年生ではなく大学2年生への調査なのかという疑問があるが、これは仮に1日で終わる調査なら、入学後、間もない大学初年次の学生と4年次の卒業前の学生、それぞれからデータを取り、4年間の変化（ただし被調査者は違う）などを調査することもできよう。しかし、この調査は1年がかりの調査である。よって、大学1年生と言っても、4月に依頼して3月にデータ提供を受ければ、入学初年次のデータというには時間がたちすぎていることになる。よって、今回はのちに成人の使用語彙、理解語彙という括りでまとめるためにも、年度内に20歳になる大学2年生を対象とした。なお、全員4年生にしなかったのは、少なくとも在籍差2年

の違いに差があるかは見られるためである。

また、この成人25名の使用語彙、理解語彙の調査は、その後、日本語教育における使用語彙、理解語彙選定の資料とする予定であるが、そのあたりは、また改めて別の機会に述べようと思う。

最後に、大変労力のかかる調査に協力してくれた佛教大学の被調査者の学生に、あらためて感謝したい。

注

- (1) 玉村文郎 (1984) 『日本語教育指導参考書12語彙の研究と教育(上)』国立国語研究所97頁
- (2) (1)に同じ
- (3) 真田信治 (1977) 『岩波講座 日本語9 語彙と意味』岩波書店125頁
- (4) 日本語教育学会編 (2002) 『日本語教育事典』大修館書店284頁(執筆・山崎誠)
- (5) 荻原廣 (2014) 『日本人の語彙量(理解語彙、使用語彙)調査を行うにあたっての基礎的研究(日本語学特集)』『京都語文』21 佛教大学国語国文学会2頁
- (6) 阪本一郎 (1965) 『読みと作文の心理』牧書店129頁
- (7) 阪本一郎 (1965) 『読みと作文の心理』牧書店130、131頁
- (8) 阪本一郎 (1965) 『読みと作文の心理』牧書店131頁
- (9) (8)に同じ
- (10) 林四郎 (1971) 『語彙調査と基本語彙』『国立国語研究所報告39 電子計算機による国語研究Ⅲ』国立国語研究所8頁

(11) 「語彙数」とあるが、正確に言えば、「語彙量」であろう。なお、他にも、「語彙量」というべきところを「語彙数」と記載されているところがある。

(12) 語彙数推定テスト解説によると、単語親密度とは、その単語がどの程度「なじみ」があると感じられるかの主観的評定値（7段階評定）で「1…なじみが無い」から「7…なじみがある」まで分かれている。この新明解国語辞典第4版の見出し語約7万語に対する親密度評定値は、20代前半を中心とした32名が行った主観的評定結果の平均値となっている。

「語彙数推定テスト解説」（最終検索日：2016.9.27）
<http://www.kecl.ntt.co.jp/icl/ir/g/resources/goito/kusei/intro.html>

(13) 荒牧他（2012）は、Twitterを使った調査を、「音声会話でない。オンライン・コミュニケーションの発言である。」としているが、「発言」としているからには、Twitterでのツイートを「話し言葉」として扱っているのだろう。しかし、一方で、「これは口語体の書き言葉とみなせるものの、実際の発話とは異なる。」ともある。ただ、そうなると、果たして、「話し言葉」として扱っているとしていいのだろうかとの疑問が生じる。

(14) たとえば、『国際交流基金 日本語教授法シリーズ 第3巻 「文字・語彙を教える」という教師用の参考書には、「聞くか読むかしたときに理解できればいい語（理解語彙）なのか、自分で話したり書いたりできる語（使用語彙）なのかという区別もあります」（63頁）とあるが、その判断をどうするかは書いていない。しかし、『テーマ別 上級で学ぶ日本語 教師用マニュアル（改訂版）』には「語彙・表現を新しく導

入する際、次の二点を可能な限り明確にするとよい。a 話しことば、書き言葉（あるいは、双方に使う）の区別。b 確実に使えるようにする語彙・表現と読んだり聞いたりする時に理解できればよい語彙・表現の区別。」（3頁）とあり、使用語彙と理解語彙を区別して教えることが教師に委ねられていることがわかる。

(15) 国立国語研究所（2007）『国立国語研究所報告126 公共媒体の外来語―外来語』言い換え提案を支える調査研究―国立国語研究所272頁

なお、調査は、A調査、B調査、C調査の3種類あり、単語を書いたカードを提示して質問を行う形で行われたのは、このうちA調査、B調査であって、C調査は1語ずつ口頭で質問を行った。

(16) 『平成13年度国語に関する世論調査』で挙げられた言葉は（1）けんもほろろ（2）いたたまれない（3）水ももらさぬ警備（4）つとに知られている（5）とみに進歩した（6）おもむろに立ち上がった（7）心もとない（8）言わずもがな（9）よんどころない事情（10）ゆゆしき（ゆゆしい）こと（下線原著）と連語や慣用語も含まれている。

なお、ほかにも『平成26年度国語に関する世論調査』（平成27年1月調査）のQ23は「あなたは、ここに挙げた言い方を聞いたことがありますか、それともありませんか。また、ここに挙げた言い方を使うことがありますか。」との間で、（1）婚活（2）イクメン（3）女子力（4）デパ地下（5）大人買い（6）クールビズの6つの単語を挙げて、それぞれ「聞いたことがない」「聞いたことはあるが使うことはない」「使うことがある」「分からない」から答えることに

なっているが、これも「使うことがある」は使用率の調査であると言える。ただし、「聞いたことはあるが使うことはない」は、「聞いたことがある」がイコール「知っている」とは限らず、理解率が認知率か判断しかねる質問となっている。

- (17) 使用語彙の定義が「個人が話したり書いたりするときに行うことのできる語の集まり」なら、「使うことができるか」という質問も考えられるが、「使う」、「使うことができる」、「使うことができる」から「使う」、「使うことができる」のであって、外国語の単語の使用を尋ねるのなら「可能かどうか」でもいいかもしれないが、母語の単語の使用に対する質問なら「使う」か「使うことがある」となる。

- (18) 森岡健二(1951)「義務教育終了者に対する語彙調査の試み」『国立国語研究所年報2』国立国語研究所96頁

- (19) (18)に同じ

- (20) 荻原廣(2014)「日本人の語彙量(理解語彙、使用語彙)調査を行うにあたっての基礎的研究(日本語学特集)」『京都語文』21 佛教大学国語国文学会14頁

- (21) (10)に同じ

- (22) 玉村文郎(1984)『日本語教育指導参考書12語彙の研究と教育(上)』国立国語研究所100頁

- (23) (10)に同じ

- (24) 窪田富男(1990)「基本語・基礎語」『講座日本語と日本語教育6 日本語の語彙・意味(上)』明治書院156頁

- (25) 現代雑誌200万字言語調査は、人名・地名を除いた語の総計が44437語と多いが、そのうち使用度数1の語は4.8%と現代雑誌九十種の用語字における使用度数1の語の割合より更に高い。

- (26) 中原香苗(2015)「『文章読解』における授業外語彙学習の取り組み」『教育開発センタージャーナル』6 神戸学院大学教育開発センター101頁

【引用文献・参考文献】

- 荒牧英治・増川佐知子・森田瑞樹・保田祥(2012)「オンライン・コミュニケーション上での平均使用語彙数は8,000語である」『研究報告自然言語処理(NL)』2012-NL-208巻9号 情報処理学会1-8頁
- 大久保愛(1967)『幼児言語の発達』東京堂出版
- 荻原廣(2014)「日本人の語彙量(理解語彙、使用語彙)調査を行うにあたっての基礎的研究(日本語学特集)」『京都語文』21 佛教大学国語国文学会1-30頁
- 窪田富男(1990)「基本語・基礎語」『講座日本語と日本語教育6 日本語の語彙・意味(上)』明治書院
- 見坊豪紀・市川孝・飛田良文・山崎誠・飯間浩明・塩田雄大編(2014)『三省堂国語辞典』第七版 三省堂
- 国際交流基金(2011)『国際交流基金 日本語教授法シリーズ 第3巻「文字・語彙を教える」』ひつじ書房
- 国立国語研究所(1951)『国立国語研究所報告2 言語生活の実態 ―白河市および附近の農村における―』秀英出版
- 国立国語研究所(1953)『国立国語研究所報告5 地域社会の言語生活 ―鶴岡における実態調査―』秀英出版
- 国立国語研究所(1964)『国立国語研究所報告25 現代雑誌九十種の用語字 第三分冊・分析』秀英出版
- 国立国語研究所(1971)『国立国語研究所報告41 待遇表現の実態 ―松江24時間調査資料から―』秀英出版

国立国語研究所 (2006) 『現代雑誌 200 万字言語調査語彙表』 公開版 (ver. 1.0) 2006. 8. 11

国立国語研究所 (2007) 『国立国語研究所報告 126 公共媒体の外來語 — 「外來語」 言い換え提案を支える調査研究 —』 国立国語研究所

阪本一郎 (1955) 『読みと作文の心理』 牧書店

真田信治 (1977) 『岩波講座 日本語 9 語彙と意味』 岩波書店

澤柳政太郎・田中末廣・永田新 (1919) 『児童語彙の研究』 同文館

田島ますみ・佐藤尚子・橋本美香・松下達彦・笹尾洋介 (2016)

「日本人大学生の日本語語彙量測定の試み」『中央学院大学人間・自然論叢』 41 中央学院大学 3-20 頁

玉村文郎 (1984) 『日本語教育指導参考書 12 語彙の研究と教育 (上)』 国立国語研究所

中尾桂子・柴田実・中谷由郁・平林一利 (2012) 『「文章表現」指導内容再考のための一考察 — 学生の語彙量、記述上の形式的規則に見られる問題点の観察をもとに —』 『大妻女子大学紀要 — 文系 —』 44 大妻女子大学 1-17 頁

中原香苗 (2015) 『文章読解』 における授業外語彙学習の取り組み 『教育開発センタージャーナル』 6 神戸学院大学教育開発センター 91-101 頁

日本語教育学会編 (2005) 『日本語教育事典』 大修館書店

林四郎 (1971) 『語彙調査と基本語彙』 『国立国語研究所報告 39 電子計算機による国語研究 III』 秀英出版

文化庁 (2002) 『平成 13 年度 国語に関する世論調査 日本人の言語能力を考える』 財務省印刷局

文化庁 (2015) 『平成 26 年度 国語に関する世論調査 漢字の

形・言葉遣い・新しい言葉』 ぎょうせい

松浦年男 (2015) 「大学初年次の学生に対する日本語語彙力調査の試行」 『北星学園大学文学部北星論集 52 (2)』 北星学園大学 53-61 頁

松田浩志・亀田美保 (2008) 『テーマ別 上級で学ぶ日本語教師用マニュアル (改訂版)』 研究社

森岡健二 (1951) 「義務教育終了者に対する語彙調査の試み」 『国立国語研究所年報 2 昭和 25 年度』 秀英出版